

若者言葉と方言への期待

さとうたかひろ
佐藤貴裕

(岐阜大学准教授)

人間は言葉を使う動物だというが、「使われている」のが実情だ。先人から無数の単語を受けつぎ、高度な敬語・慣用句・ことわざを理解し、漢字・平仮名・片仮名で何とか書き分ける……こんな受け身の日常に慣れてしまえば、言葉を作り出そうとは夢にも思わない。もとより、そんな機会も一生やって来そうにないが、だからこそ、言葉の生まれ落ちる瞬間に立ち会えただけでも、ちょっとした幸運だろう。

一九八二年だったろうか。秋の日の午後、赤羽駅(東京都北区)付近を走る京浜東北線の車内で、二人の女子高生がこんな話をはじめた。

「最近、自転車のこと、チャリンコって言い出したけど、ツツパリっぽくて、やだよね」

「うんうん。じゃ、どうする？」

「もっとカワイイ言い方にしようよ。たとえば、ジテンコとかっ!」

どこにでも居そうな高校生のすること。特別な理由はない。若さがさせるのだ。大人なら、言葉の方を自分たちに合わせるという発想とエネルギーに、あきらめるしかないだろう。一方で「お遊びじゃないか」と言いたくなるころだろうが、大人

たちの言語表現も誉められるものとはかぎらない。

新聞紙面の意味不明な見出し、ファッション雑誌におどる新語の乱発、『○○の品格』という本が一度流行れば、『品格本』の陸続。「創業者のDNAは全社員に受け継がれています」という安直な譬喩……日本語を安っぽくしているのは大人ではないか。若者の言語表現のほうが己の感覚を満たすだけで見返りを求めない分だけ、動機も純粋なのだと思わされる。

若い人たちの言葉は、実は言語学的にみても興味ぶかい。

たとえば「ちげーよ」には鋭さがある。「違う」は姿・形は動詞なのに、動作・行為ではなく状態を意味する。つまりは形容詞並みだから「ちけー(近)よ」「なげー(長)よ」と同じく、エ段長音を使う「ちげーよ」が口へのぼせやすいのだろう。日本語の不整合への異議申立てである。

「KY」にはしたたかさがある。「空気、読めない」と、雰囲気を感じないことを咎めるのだが、忘れ去られるかに見えた日本的な「察し」を取り込んで、新たな評価語にまで仕立てるあたり、よほど発想が柔軟なのだろう(実際には、彼らなりに「察し」の利点を発見したのであって、伝統とは無関係とも見られる。それならば、逆に「察し」にたどりついたことが、日

本人らしきを持つことの、深い次元での証明になっていようか)。

そんな若い人たちが方言にも注目しはじめた。ケータイメールでは、沖縄方言の「○○さ〜」、北海道方言の「○○ッしょ!」が使われている。口にする人もいそうだ。簡単な方言集がもてはやされたこともあった。感覚にあう単語を見つけては会話・メールにちりばめるのだが、縁のない方言から失敬するのだから海賊のようでもある。現代の若い人は、こと言語表現に関しては、鋭くしたたかで貪欲なのだ。

方言単語の背景を考慮しない、切り花を飾ってよろこぶような浅薄さも感じられるが、差別感や偏見がないからできることであろうし、それどころか、方言に憧れを抱く人もいる。首都圏出身者の中には自分の言葉を味気なく感じる人もいるというのだ。自分だけの切実な感情さえ、テレビと同じありふれた言葉に分解・還元するしかないやるせなさ、でもあろうか。私も首都圏出身だが、かろうじて持ち合わせている方言的な要素——エビガニ(ぎりがに)・ズルコミ(割り込み)・ヤブク(破る)・カラス(片づける)——が、なけなしの宝物のように思えることがあるが、根は一緒だろう。

言語感覚の豊かな若い人たちが、それぞれの理由で方言を求めている一方で、共通語化のために、方言色が急速に薄まっていくのも事実である。ただ、すでに研究者は、新方言やネオ・ダイアレクトなどと呼ぶ新たな方言的現象・表現も確認している。

話がうますぎるかもしれないが、実は冒頭のジテンコでもそれが確認できる。以前、私のホームページで紹介したところ、

大阪府北河内出身の方がメールをくださった。男子はチャリキ、女子はジテンコといい、ジテンコツ(自転車通学)という派生語もあるという。愛用のほどが知られよう。

この言い方が東京都心では定着していないところを見ると、関西の一部で独自に生まれたのだろう。女子が使うのだから、ジテンシャとチャリンコの二つから「カワイイ言い方」として誕生したに違いない。このように地方でも、言葉を発信するとされる都心と同じように、言葉への働きかけや創造力が存在し、日常的に機能しているのである。

実力はもっており、求められてもいる。これは、研究者の立場を離れた、一日本語話者としての願いだが、どうか、地方の若い人には、臆せず新たな日本語・方言を供給して欲しい。切り花的な使用にさえ寛容であるほど、圧倒的な豊かさをはぐくみながら。そうした創造的な営みは、次代の日本語を作ることに寄与するはずだし、地方であれ中央であれ、それをした世代から新たな言語芸術の担い手も生まれ、理解者も育っていくことだろう。

日本語ブームといわれる中、一見、遊びのように見える言葉への働きかけが、創造的な活力を涵養し、いき渡らせる役を果たしていることに注目したい。故事成語や難しい漢字の読み方など、断片的な知識の答え合わせで満足するのも悪くはない。が、そこから未来の日本語が生まれるとは限らない。さまざまな点でグローバル化が叫ばれる現代、日本語が生き続ける道は、若い人の言語行動の質にかかっているわけだが、日本各地の若い人たちの鋭くもたくましい言葉遊びを見聞するにつけ、次世代の日本語が確実に芽吹いていると直感するのである。